

由比ヶ浜結衣の幸せな誕生日

しゃげ式

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ガハマさん生誕祭ということで書きました。

二人は付き合ってから同棲している設定です。

目次

第1話

「ヒツキー好き」

「ん」

「ヒツキー好きだよ」

「聞こえてる」

「ヒツキーすこすこのすこー!」

「待てお前どこでそんな変な言葉覚えた」

ソファーに隣同士に座るあたしとヒツキー。ヒツキーは本からあたしへばつと視線を向けて、びっくりした様子で見つめてくる。ヒツキーの心配した顔はやっぱり可愛いなあ。

今日は六月十八日。つまりあたしの誕生日。ヒツキーの愛しの愛しの彼女が生まれたとつてもおめでたい日。

……だと言うのに。

「あまり変な言葉は使うなよ。アホに見えるぞ」

全つ然気付いてくれてる素振りが無い! もう付き合つて三年、今居るこの部屋だつて同棲して一年は経つのに!

「ヒツキーのアホ!」

「いや今俺がアホつって……あ、バカつて言つた方がバカ理論か。成長したな」

「ヒツキーは高校生の頃から何も成長してないけどね」

「今日はやけに辛辣だな」

「知らない! やむ!」

「だからお前どこでんな言葉覚えたんだよ」

答えは最近ヒツキーが浮気中のゲームから! 言わないけどね!
「でもそんなヒツキーも好き」

「ん」

「ヒツキーは?」

「え?」

「ヒツキーはあたしのこと好き?」

「……煙草でも吸おうかね」

ヒツキーはあたしからふいつと目を逸らして、テーブルの上にあつた薄い黄色のパッケージを手に取る。慣れた手つきで取り出した煙草に火をつけた。

カチツ、……ふう。静かな部屋にヒツキーの溜め息にも似た吐息が響く。

「じゃ、あたしも失礼します」

「またか……。それ吸いにくいんだよな」

あたしはソファアーに座るヒツキーの上に座って抱きつく。えっと、確か対面座位？ って言うんだっけ？ 詳しくはわからないけどそんな名前だった気がする。

「ん」

口では面倒臭がるヒツキーも、あたしがこうすると自分から抱きしめてくれる。

その度に、あたしは好きな人から抱きしめられてるって実感して、いつもドキドキするの。

「ヒツキー好き」

「知ってるよ」

「ヒツキーは？」

「……ほれ」

ぎゅうつと、抱きしめてくれてる力が強くなる。あたしはびっくりしてんっ、なんて変な声を漏らしてしまう。

「言わなくてもわかるだろ」

「……言ってほしいのに」

「にしてもお前、何で俺が煙草を吸う時になつたら抱きついてくんの？ 別に吸ってない時でも良くないか？ いやそんな時にしろって言ってるんじゃないけど」

「……言っても笑わない？」

「？ 別に笑いはしないと思うが」

ヒツキーの声は何だか不思議そう。そりやいきなり笑わない？ なんて言われたら不思議に思うよね。

……正直、言うのはちよつと恥ずかしいんだけど。

「変態って言わないでね？」

「おう」

「思うのも禁止だから」

「わかったわかった」

「……ヒツキーの煙草の匂いが、あたしに染み付く気がするから」

「ん？ 染み付く？」

「だ、だから！ 好きな人にマーキングされてる感じがして、キュンキュンするの！」

普通の煙草ならそんなことは思わないけど、ヒツキーの吸う煙草はほんのり甘いから。何だかヒツキーだけの特別な匂いって気がして、え、エッチな気分になるんだもん！

「……お前」

「ひ、引いた!? やっぱり引いたんだ!? ヒツキー引かないって言ったのに!」

「い、いや。そんなことは……」

「ほおおおらもうヒツキーのバカああ!! だから言いたくなかったのに!!」

あーもう顔熱い! でも興奮しちゃうのはしょうがないじゃん!

「ていうかヒツキーが一番悪いんだからね!」

「責任転嫁がとんでもないな」

「だってヒツキーいつもぎゅっとしてくれるじゃん! お前は俺のものだーって思ってるの伝わってきてるんだからね!」

「いやそんなこと思ってたねえよ」

「じゃあ遊びだったんだ!」

「もっと思ってたねえよ!」

だ、だから最近ゲームばかりしてたんだ! 今日はイベントだからって言って一時間くらいずっとシャンシャンシャンシャン!

「線と線が繋がったよ!」

「そしたら四角形になるじゃねえか。点だ点」

「て、点と点!」

「……心配しなくても、お前のことは本気だ。告白のこと忘れたのか」

「あ……」

言われて思い出す、あの日のヒツキー。

あれは確か夏の花火大会。

毎秒胸がときめきながら、口から心臓が飛び出てしまいそうな、少しだけ手も震えながら。

それでも伝えた、あたしの等身大。

『ずっと前から……ううん、今初めて、今も初めて、一緒に居れば居るだけ、ヒツキーのことをどんどん好きになってます。だから——』

その時、胸から手に伝わったドキドキを共有してくれるように、ヒツキーはあたしの手に自分の手をそっと置いてくれて。

『付き合うか』

短い言葉だったけど、それは初めてあたしの“好き”を受け止めてくれた言葉。夏なのに暖かいと感じたその言葉に、思わず泣いてしまったのはしようがないよね。

それだけ嬉しかったんだもん。

「……やっぱりヒツキーのこと、好き」

「ん」

「今日はそればかり。『ん』以外言えない身体になったの？」

「んん」

「乗らなくても良いから……きやつー！」

いつの間にか煙草は灰皿に置かれており、男の人特有のゴツゴツとした両腕で抱き寄せられる。さつきよりも強い力は、絶対離さないって口じゃなくて全身で伝えてくれてるみたい。

「……あたしの身体、もうヒツキーにマーキングされちゃってるから」

「俺もマーキングしたつもりだ」

「ふふっ、ヒツキーってば変態」

「言つとけ」

あたしも負けじと抱きしめ返す。早くなった鼓動は、どっちのものかな。

あたし的には、どっちのも良かったら良いな。なんて思っちゃう。

「……丁度良いか」

「何が？」

「ほら、目瞑れ」

「え、うん」

言われた通りずっと目を閉じる。何だろ、キスしてくれるのかな。あたしは自然とキス待ちの顔になる。

……けど、ヒツキーは一向にキスしてくれない。なに、この期に及んでキスするか悩んでるの？ こんなに良い雰囲気なんだから遠慮なくしてくれても良いのに。

「ほら、目開けろ」

「なんだ、キスしてくれないじゃん」

「何を期待してたんだよお前……」

やれやれとでも言いたそうなヒツキー。やれやれはこつちだよ。ヒツキーからのキスなんて滅多にないから嬉しかったのに。

「首。他のこと意識し過ぎて付けたのも気付かないとかどんだけだよ」

「え、首？ あ……！」

首元を触るとチャリ、と可愛い音が鳴った。

「ネックレス!? でも、何で」

「何でってお前、今日誕生日だろ。忘れてたのか？」

「いや、でも、ええ？ ヒツキーがサプライズ？ 嘘、でもホントだよね？ これ別にサブレの首輪じゃないよね？」

「また懐かしい話を持ち出したな」

じゃあヒツキーはあたしの誕生日は忘れてなかったってこと？ ずっと渡すタイミングを見計らってたってことだよな？

「誕生日おめでとう」

「……ヒツキー！」

「おわっ!？」

ガバツともう一回抱きつくのと、ヒツキーは予想してなかったのか、なすがままにソファアの背もたれに勢い良く背中を預けた。

……ヒツキーってば、ホントどれだけあたしをキユンキユンさせた

「気が済むんだろ！」

「ありがと！ 一生大切にするね！」

「ん」

「あとね、もう一つだけ誕生日プレゼントが欲しいんだけど、良い？」

「おう」

「好きって言って！ あとキスも！」

「二つじゃねえか」

「だって、だって！ ヒツキーがこんなに嬉しいことしてくれたんだも——んっ!?!」

あたしが言い終えるより早く、唇が塞がれる。突然のことで目を閉じる間もなかったけど、代わりに。

ヒツキーのキスしてる時のカツコイイ顔。これはあたしだけのものだよね。

ゆつくりとお互いの唇を離すと、コツンとおでこがぶつかった。

「好きだ、由比ヶ浜」

「んー！」

「……はは、意趣返しだよ」

でも多分、〃あたしも大好き！〃 っていうのは伝わったよね。

もしかしたらヒツキーも、いつもあたしの好きに〃ん〃 っって答えるのはそういうことなのかも？ そうだったら良いなって思うけど。

……ダメ、〃ん〃 だけじゃ我慢出来ない！

「あたしも大好きだからね！ ヒツキー！」